

II-389

京都市内山鉾町のサウンドスケープ調査

— 音環境把握の方法論的考察を含めて —

京都大学工学部 正員 平松幸三

京都大学工学部 正員 高木興一

1. はじめに

騒音の社会調査においては、広く社会的に騒音と認められている航空機騒音や道路交通騒音などについて、その曝露量と住民反応との関係を追求するのが、通例である。それは、どの音が騒音であるかを調査者があらかじめ決めた上での一種の仮説検証であり、調査対象地域の特殊性を離れた普遍性の高い結論を得ることを目的とするとともに、方法論的には、現象を要素に還元し、要素間の数量的関係を得ようとするものである。こういった方法論で音環境を把握した場合、調査対象地域の包括的な把握にはならず、調査者自身が予め持っている知識によって限定された、一面的なものとならざるをえない。では、音環境を把握するための調査とは何を意味するのか。山鉾町における調査を例として考察したい。

2. 調査地区

調査対象地区とした山鉾町は、祇園祭の山鉾巡行を執り行う32ヶ町の総称で、京都市内中心部上京区と下京区に位置する。この地区を対象にした理由は、1)範囲がある程度限定されていること、2)京都でも最も古い街区であること、3)祇園祭りの囃子という特徴的な音があること、4)歴史的資料が入手しやすいこと、などである。今回の調査では、その中から居住人口が比較的多く、種々の道路を含むように考慮して、8ヶ町(六角、百足屋、小結棚、矢田、芦刈山、風早、木賊、太子山)を選んだ。

3. 調査方法

調査は、環境音の収録、質問紙調査、自由面接法による聞き取り調査からなる。従来の仮説検証型の調査では、騒音曝露量と住民反応を独立に測定し、両者の関係を明らかにするのに対し、今回の調査では物理測定と住民反応とは相互にフィードバックする形で行われる。環境音の収録にあたっては、地区内の19ヶ所で、早朝、午前、午後、夕方、夜間の各時間帯に10分/時、テープレコーダ(SONY, DTC-1000ES)を用いて、すべての音を録音するとともに、聞こえる音を記録した。地区内の全戸(戸数約500)を対象にして、留置き法で住民の音意識に関する質問紙調査を行った。質問紙は16項目からなり、ごく短いフェーストのあとに、騒音に関する項目を配置し、その後に地区内で聞こえる生活音、季節の音、京都らしい音などといった質問項目を配置した。調査票の配布数は267通、回収は227通であった。地区内に居住するか、祇園祭に関係する、50～80歳代の男女17名を対象に町内の音と生活について自由面接法による聞き取りを行った。

4. 日常的音風景

山鉾町の日常的音環境を支配する音は、自動車の走行音である¹⁾。たとえば、六角町の町会所の前(新町通)での騒音レベルの時間的変化をみると、Fig. 1に示すように、昼間自動車の交通量が多い時間帯には、騒音レベルが高く、夜間交通量が少なくなると騒音レベルも低くなる。同様の傾向は、週内変動にも認められ、週末に騒音レベルが低く、平日に高い。自動車走行音の騒音レベルとしては、1日および1週間を周期とするサイクルが認められる。

アンケート調査の結果をみると、地区内の人が回答する「時間を知らせる音」「季節を知らせる音」は、以前調査した²⁾東山八坂地区に比べて、その種類が少なく、Table 1に示すようにあげる人員の割合が非常に低い。これは、山鉾町の日常的音風景が、自動車の走行音は別として、時刻や季節によって大きくは変わらないことを示す。

5. 祝祭的音風景

夏を感じさせる音として、山鉾町居住者の約4割が祇園囃子の音をあげている (Table 1) ように、居住者にとって祇園囃子は特別な意味を有する。第一に、祇園祭の期間中は、町内の音風景が大きく変わるのである。二階囃子のあるときには、昼間こそ交通騒音に満たされるが、夜になると町内で囃子の聞こえないところはない。御山胴組立の朝、家の中にいても聞こえるさまざまな音で、いよいよ祭だ、と町の人は実感する。御松建は町内の一大イベントである。その日から、町内は自動車の通行が禁止され、夜には山の上で囃子が始まる。青山などには露店もでて、人通りと囃子の音で満たされる。17日の巡行の朝、山が出発した後、しばしの落ち着きの後、他町の山や鉾が新町通を通って帰り始める。最後に御山が戻ると、後片付けが始まる。

聞き取り調査においては「1年は祇園祭から祇園祭まで」といった言葉が聞かれ、地区の人々にとって祇園祭が1年の区切りとして大きな意味を持つことが知られる。つまり、音風景も人々の意識も、祇園祭によって時間的に明確に分節化されている。

また、「祇園祭のために生きている人がいる」「パリで暮らしているとき、7月になると祇園囃子の空音が聞こえてしかたないので京都にもどった」など、居住者の意識は祇園祭と囃子に分ちがたく結び付いている。しかし同時に、囃子の音が嫌な人もあり、騒音だ、と言って苦情を訴えた人もいる。多くの中学・高校生は、囃子方を勤めたことがあるだけにかえって囃子の音で定期試験の勉強が妨げられて困った。このように地域の人々の祇園囃子に対する態度は多義的である。

6. あとがき

山鉾町の音風景は、日常と非日常(祇園祭の期間中)によって大きく変わり、かつそれに対する居住者の意識も多義的である。これは、調査を進めて行く過程で、自らの聴取体験と種々の調査結果を通じて得た、調査者自身の発見であった。この調査を通じて筆者は、音環境の把握とは、調査者による音環境の発見と構築であり、調査とは音環境発見のプロセスである、との考えに到達した。その意味で、発見が進むにつれて必要な調査方法が用いられるべきであり、また調査の目的に応じて、調査方法は変わるであろう。この種の調査では、騒音を含めて音が共同体にとって持つ意味が、結果的に明らかにされる。この点が、あらかじめターゲット(騒音)を決めて調査する仮説検証型の調査とは、異なるところである。

なお、本研究は一部、平成元年度文部省科学研究費補助金 (No. 01550424) の補助を受けた。

<参考文献>

- 1)平松ほか、山鉾町(京都市)の音環境と住民の意識、音響学会講論集、579-580、1989、10。
- 2)平松ほか、京都市内修景保全地区のサウンドスケープ調査、第42回土木学会講演集、II-337、704-705、1987、9。

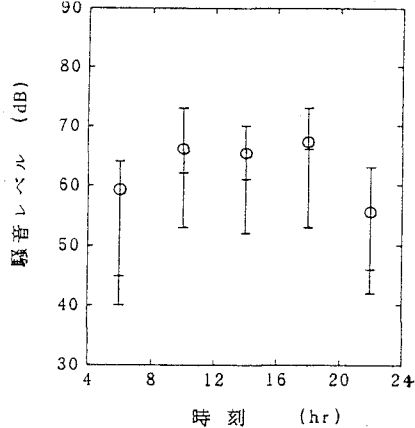


Fig.1 六角町における騒音レベルの時間的変動

Table 1 時間・季節に関連して聞かれる音
[上位2音; ()内の数字は人員の百分率]

	山 鉾 町	東山八坂
時間を知らせる音	朝 鐘(6) 牛乳配達(3)	鐘(39)鳥(14)
	夕 豆腐屋(6) 学校帰る(2)	鐘(22)豆腐屋(1)
季節を知らせる音	春 うぐいす(6) 鳥(6)	うぐいす(24)鳥(11)
	夏 祇園囃子(37) 蛙(14)	蛙(44) 祇園囃子(6)
季節を知らせる音	秋 虫(8) 運動会(5)	虫(24) --
	冬 托鉢僧の声(6) 寒行の太鼓(5)	風(25) 托鉢僧の声(2)